

# 川端康成研究

——同時代における「高原」の様相・軽井沢の時空より——

大 橋 諒 也

本稿で取り扱う「高原」は、国際的な避暑地軽井沢を舞台とした川端の連作群<sup>一</sup>である。日本近代文学においては、しばしば文化の理想郷としてイメージされてきた軽井沢であるが、川端が描いたのは日中戦争が影を落とす戦時下の軽井沢であった。

しかし、この特徴的な舞台設定とは裏腹に、「高原」はこれまで研究対象とされることの少なかったテクストでもある。本稿では、同時代の文脈を参照しつつ「高原」のテクストに内包された諸問題の発見を試みる。また、同時代状況が作品に与えた影響、およびそれが左右した作品の行方を探ることによって、他の軽井沢文学とは一風変わった雰囲気を持つ「高原」の特徴を描出したい。

避暑地としての軽井沢の始まりは、明治一九年に遡る。この年、カナダ生まれの宣教師アレキサンダー・クロフト・シヨールが軽井沢を訪れると、それを嚆矢として次々に宣教師たちの別荘が建てられた。以降、軽井沢は国際的な避暑地として発展し、多くの政治家や駐日大使などが夏を過ごす聖地とされていく。これが近代軽井沢の黎明期である。

その後、大正二年には「軽井沢避暑団」が発足し、軽井沢の自治に影響力を持つようになった。この避暑団は英米の宣教師が中心の団体であるため、特に風俗面での規制を設け、清浄な軽井沢を守ることに尽力。こうした清浄性の上に、軽井沢のイメージは立ち上がった。

小松史生子<sup>二</sup>によれば、軽井沢は「リゾート地開発の一

方で、学問の地としても拓かれる」場所であり、それゆえに「室生犀星、堀辰雄、立原道造、川端康成、正宗白鳥といった作家達に愛され」、「彼らの文学がしばしば軽井沢を舞台に描かれることから、いっそう軽井沢に文化の理想郷を夢想するイメージの回路が、一九二〇〜三〇年代にかけて固定し普及する」と説明されている。

ここに挙げられている作家で言えば、堀辰雄などが虚構の軽井沢を描いた代表例であろう。昭和一年から書き出され、一三年に単行本が発売された堀の『風立ちぬ』は、軽井沢のサナトリウムで過ごす恋人たちの小説である。それはまさしく清浄な避暑地の物語であり、「文化の理想郷」といったような軽井沢イメージを喚起させるものではなかったか。堀の描いた軽井沢について、柴田翔は以下のように指摘する。

堀辰雄の軽井沢なり富士見、追分の魅力は、それが現実の軽井沢その他の土地を舞台にしていながら、しかし同時に、確固とした虚構の世界となっているというところにある。三〔傍線部は引用者。以下同じ〕

つまり文学者の描く軽井沢とは、必ずしも現実の軽井沢を精巧に再現したものではなく、むしろ虚構性の強いものであった。清浄な避暑地というイメージを後盾としなが

ら書かれたこれらの文学は、同時代の評言では「軽井沢も」の「軽井沢文学」などと呼ばれている。

では、そのような状況下で川端が「高原」に描き出した戦時下の軽井沢とは、一体どのようなものだったのか。

昭和一二年に日中戦争が勃発すると軽井沢から宣教師の引き揚げが始まり、避暑地にも戦争状況が前景化してくる。翌一三年には日独防共協定の影響によりヒトラー・ユーゲントが来軽。これは同年八月二四日付の『東京朝日新聞』において「軽井沢ナチス一色」という見出しで報じられている。また、連合国との緊張が高まる昭和一六年には英米人の別荘は没収され、撤退する英米宣教師たちに代わってドイツ人が増加。軽井沢は、英米蘭領を抜け出した枢軸国側の避難所のような様相を呈することになった。

川端はこうした軽井沢の現実を題材として「高原」連作の執筆を開始。テクストには昭和一二年の支那事変、とりわけ第二次上海事変などの話題が書き込まれているが、三年に亘る執筆期間を設けながら作中の時間は一二年の夏から進まない。川端自身、「この作品の「時」は一夏に限つたつもりである」と語っており<sup>四</sup>、昭和一三年以降の軽井沢は描かれないのだ。この「高原」が当時どのような反応を受けたかについて、松本和也の先行研究がある。

確かに量的には、第一作「高原」に多く日中戦争の

モチーフが書きこまれている。ただし、その後の四作品においても、第二作の舞台は引き継がれており、(中略)通奏低音よろしく日中戦争のモチーフは書きつづけられている。従って、小説表現に即して考える限り日中戦争(事変)という論点は、「高原」連作すべての同時代受容において、捨象されずに読みとられてもよかつたのだ。五

右の論によれば、「高原」連作すべてに日中戦争のモチーフが書き込まれているにも関わらず、徐々に時局的な視点が排除され、軽井沢の美や川端自身の執筆技量に着目した同時代評が増加していくと言及されている。やはり「時」が問題であろう。

森山啓が「本年度の小説」(『文芸』昭和十二年二月)において「芹澤光治<sup>ママ</sup>氏の「この秋の記録」をはじめ、(中略)川端康成氏の軽井沢もの「風土記」まで際物に反する性質をもつに拘はらず、現代の国内生活の様相描写の一端において戦時に触れてゐる」と述べているように、「高原」はそもそも時局性の強い作品として書き出されながら、作中の「時」が進まなかったがために時局性を失ったテクストでもあるのだ。

結局、川端はヒトラー・ユーゲント来訪に代表される昭和一三年以降の軽井沢を描こうとはせず、昭和一四年一二

月の執筆分「樅の家」を最後に「高原」の筆を止めた。

ここで引き合いに出したいのが、昭和一〇年代の川端を語る上で外せない作品「雪国」である。昭和一〇年から一二年にかけて書き継がれた「島村のもの」とされる連作は、昭和一二年に「雪国」として単行本化された。これが、いわゆる戦前版の「雪国」だ。

この発表後、「雪国」は戦時下でも読まれ続け、名作として評価されることになる。昭和二二年までに加筆されたものを含む戦後版「雪国」のあとがき<sup>六</sup>を見ると、川端自身も「雪国」の人気を認識していたことが窺える。

私の作品のうちでこの「雪国」は多くの愛読者を持つた方だが、日本の国の外で日本人に読まれた時に懐郷の情を一入そそるらしいといふことを戦争中に知つた。これは私の自覚を深めた。

また、これとほぼ同時期に書かれた川端の随筆「哀愁」(『社会』昭和二二年一〇月)には、以下のような記述も見受けられる。

そのころ私は異境にある軍人から逆に慰問の手紙を受け取ることが少なくなかつた。(中略)その人達は偶然私の作品を読み、郷愁にとらへられ、私に感謝と

好意とを伝えてきたものであつた。私の作品は日本を思はせるらしいのである。

共通するのは、「雪国」を含む川端の作品が日本を想起させるものとして読まれている点だ。李明喜<sup>七</sup>の指摘にもあるが、「雪国」は温泉場が描かれていることから「故国日本を思い出させる装置として機能し」たとされる。川端が日本の美を描写した作家としてイメージされやすいのは、こうした作品の効果に拠るところが大きいだろう。

森山啓は「本年度の小説」(『文芸』昭和十二年二月)の中で、「雪国」を次のように評している。

川端康成氏の「雪国」、尾崎士郎氏の「人生劇場」、石川淳氏の「普賢」、(中略)等、賞を受けた作品はいづれも政治的なものは回避した文学であつた。

ここからは、「雪国」が非政治的、非時局的な作品として読まれたことが推察できる。「故国日本を思い出させる装置として機能」するためには、現実の戦時下日本とは切り離された幻想の純日本の空間で進行する物語が必要とされたのだ。

さて、一方で「高原」はどうであろうか。「高原」連作の発表時期は昭和一二年から一四年にかけてであり、「雪

国」連作の書かれた時期と隣接している。どちらも特定のトポスに着目した作品でありながら、両者の評価は大きく異なっている。この差異を生み出した要因には、時局というものが大きく関わっている。

そもそも、白系ロシア人が登場する「雪国」が本当に「政治的なものは回避した文学」であるかどうかは怪しい。もしそうであるならば、島村に「あんたどこから来ました」と問われて答えに迷うロシア女の物売りは、作中から排除されるはずである。

つまり、ここで問題となるのは「雪国」の本質ではなく、「雪国」が同時代におけるナショナリズムの高まりや外地への出征という社会情勢を背景として評価されたという状況だ。純日本的なイメージを想起させるトポス(＝越後湯沢)を舞台とした「雪国」は、戦時下の日本人が帯びていた愛国精神に適合しうる作品であつた。同時代の読者が希求する純日本イメージに適っていたのである。

それとは対照的に、「高原」の舞台である軽井沢は異国風な雰囲気の色濃い土地となっている。近代に入ってから外国人によって開かれた避暑地であり、作中でも「四十カ国程の人種が雑居」と語られる軽井沢は、時代の求める純日本的なトポスではなかった。

政治色がより強くなる昭和一三年以降の軽井沢を川端が描けなかったことには、「高原」が純日本的なものを求め

る読者の欲望、あるいは時代の要請に対応できなくなったことが原因の一つとして考えられるのではないか。それは今日における「高原」というテキストの埋没性とも深く関わっているように思われる。

## 二

ここまで、テキストを取り巻く昭和一〇年代の大まかな時代状況を見てきたが、「高原」や「雪国」に描かれるトポスにはある共通点が潜む。それは、軽井沢にせよ越後湯沢にせよ、東京に代表される近代都市とは対照的な土地であるという点だ。つまりは「地方」である。これは同時代文脈において、何を意味するのであろうか。

昭和一〇年代、戦時下日本では「地方」および「故郷」というものへの関心が高まっていた。日本の大陸進出に伴い、文壇で「故郷」というキーワードが注目されるようになったのである。例えば、昭和一年には「新風土記叢書」といったシリーズ本が発売されているが、これは作家たちに自分の故郷について紹介してもらう企画<sup>八</sup>であった。その前年である昭和一〇年には、風土の観点から民族性や文化を考察した和辻哲郎『風土』も刊行されており、大陸への移民や出征が叫ばれる当時において、日本という「故郷」への眼差しが強くなったことはこれらの出版状況からも見

えてくる。それは戦争へ向かう国家と不可分なものとしての「故郷」であり、帝国のナショナルリズムを浸透させていく役目も担っていた。軽井沢や越後湯沢を含む「地方」という概念は、「故郷」に内包されたものとして考えることができるだろう。

このような「地方」への着目は、文壇に限った話ではない。当時、大衆の間では交通網の発達によるツーリズムの流行があったことを大原祐治が指摘している。

さらにこの時期には、「時刻表」や「地図」のみならず、観光を奨励するべく鉄道省が刊行する書物——ほぼ毎年改訂される『鉄道旅行案内』や一九二九年から三六年にかけて刊行された『日本案内記』全八巻など——が、そうしたツーリズムを増幅させてもいた。<sup>九</sup>

知識人たちの「故郷」熱が盛り上がる一方で、大衆間にもこうしたブームが見られたことは興味深い。無論、ツーリズムの隆盛とナショナルリズム志向は全てが同質の問題ではないのだが、昭和一〇年代前後にあって「地方」へ意識を向ける機会が増えていたことは確かであろう。

こうした状況下で、川端は信濃についての作品群を書き始める。「高原」も信濃作品群の一つとして位置づけられるものだが、信濃の伝承や郷土を描いた「牧歌」などとは

違い、「高原」の舞台となる軽井沢は日本古来の歴史がイメージされる土地ではない。昭和一〇年代初期における川端の執筆活動は「地方」という文脈でその側面を捉えることができるが、信濃という「地方」の中でも異国人雑居の軽井沢——近代日本人の「故郷」になりえない土地（そして人工的に象られた自然）——を連作で描いたことは、注目に値することではないか。<sup>二〇</sup>

川端は「高原」の執筆に当たり、虚構の軽井沢ではなく、現実在即した時局的な軽井沢を選択した。しかし、川端は刻一刻と移り変わる戦時下の軽井沢を描き切れず、同時に「故郷」たりえない舞台設定は時代の求める作風から逸脱し、「高原」は途絶していくのである。それこそが、日本古来の自然が残るトポスを描くことで「故郷」を思わせる作品として成立した「雪国」との最大の相違点であろう。

ただし、「高原」は決して「故郷」という問題を無視した作品ではない。作中、主人公の須田は「世界中が混血児ばかりになったらどうですか」と語るが、世界中に混血児が溢れるということは、民族の「故郷」が拡散するということでもあるはずだ。つまり「高原」とは、誰の「故郷」でもない軽井沢を描く一方で、一つの土地やイメージに統合されない「故郷」を考えたテキストでもあったのではないか。この数年後、川端が「五族協和」を掲げた満州国に大きな関心を寄せるのも、外地へ拡散した「故郷」と無関

係ではないだろう。

### 三

令嬢も神聖な美しさであった。髪がたうもろこしの毛の枯れたやうに汚く、そのほかにはあまり混血児らしいところはないが、瞼の切れの鋭い眼、少し高い鼻、うひうひしい歯、さうして日本風な肌の色の頬に、なんともしやうなく地上離れした光があつた。

右の引用は、第五作「椛の家」に登場する混血児を描写した本文である。須田が日仏の血を引く令嬢に惹かれる場面であるが、考察に当たっては「混血」をめぐる同時代状況について言及する必要がある。

「椛の家」は昭和一四年一二月、『公論』に発表された。「高原」連作には多数の外国人が登場するが、混血児が描かれるのは「椛の家」のみとなっている。この昭和一四年（一九三九年）という発表時期において、「混血」はどれほどの磁場を持っていたのだろうか。

同年に発表された石川淳「白描」や金史良「光の中に」といった小説を例に挙げながら、山口俊雄は次のように分析している。

両作品が発表された一九三九年は、日中戦争三年目の総動員体制下、厳しい言論統制の中でのことであった。したがって、いずれの作品も、言葉を奪われた状況の中での韜晦という性格を帯びざるを得ず、《混血児》の起用は、両義性・多義性の「活用」のためだったと見るのできるのである。二

石川淳の「白描」は日本とユダヤの混血児を中心とした物語であり、金史良の「光の中に」は日本と朝鮮の混血児が主役となる。どちらの混血児も、政治陣営を意識した想像力が働くような「混血」である点は興味深い。何より重要なのは、「混血」という属性が様々な要素を内包しているということと、作家たちがそうした「両義性・多義性」に着目していたという状況であろう。

この前年の昭和十三年には、中里恒子「乗合馬車」が芥川賞を受賞するが、これも混血児を描いた作品である。「混血」というテーマは、この時期の文壇にも一つのトレンドとして根付いていた様子が見て取れる。

また、「血統」への関心が高まったことは日本国内の情勢だけで説明がつくものではなく、その背景には戦争の影響で輸入された思想も関わっている。

当時、ドイツ文学者の高橋健二によって、同盟国であったナチス・ドイツのイデオロギーが日本国内に紹介されて

いた。これについて、関楠生の解説を引用しておく。昭和十四年の状況についての言及である。

この年四月には、「ヒトラーの東方政策」(『革新』所載)が発表される。(中略)ヒトラーの意図を、高橋は是認し、肯定的に紹介、解説する。つづいて五月、エッセイ「血と土に基づく新文化」が、『読売新聞』に寄稿される。三

ナチスの人種政策スローガン「血と土」<sup>二三</sup>が日本に流入したことも、文壇で「血統」の問題が扱われやすかった一要因だったと判断できよう。作中で須田が発する「世界の文明国のうちで、何国人が一番純血であり、何国人が一番混血なのだらうか」という台詞にも、「血統」にまつわる同時代状況が見え隠れする。

こうした指摘は先行研究にも見られ、山口俊雄は「樞の家」とほぼ同時期に書かれた石川淳の「白描」について、「作中であからさまに作動させられている〈血の論理〉そして〈風土の論理〉が、日本が一九三六年十一月に防共協定を結んだ相手国であるナチス・ドイツの人種政策の標語「血と土 Blut und Boden」に対応していることは見易い」<sup>二四</sup>と述べている。これは「血と土」というキーワードが「血統」の問題だけでなく、日本国内における「故郷」への注

目とも重なりうることを示した証左であろう。

以上を念頭に置くと、「地方」に位置する軽井沢を描き、「混血」の問題を染み込ませた「高原」もまた、昭和一〇年代に文壇を席卷した「故郷」や「血統」という時代の雰囲気存分に呼吸して紡がれたテキストであると言える。

ただし、「高原」における混血児が全てこうした文脈だけで捉えられるとは考えにくい。何故ならば、「樫の家」で描かれる混血児は日仏の混血であり、ユダヤあるいは朝鮮との混血とは事情が異なるためである。ナチスに迫害されたユダヤの「血」や帝国日本の植民地となっていた朝鮮の「血」は強い政治性を喚起するものであるが、この日仏混血児はどのように考えるべきなのか。

村上仁美の言によれば、「この昭和初期という時代は1933（昭和8）年に映画「巴里祭」が封切られ、シャノン（もともと当時では「フランス小唄」などと呼ばれていた）やレビューが流行するなどフランス文化が盛んな時代であった」<sup>一五</sup>とされている。

また、菊村紀彦は「巴里祭」を始めとするフランス映画が流行した当時について、「ニッポンの人が、やや敵性国家に近かったアメリカ映画より、遠い国、芸術の都、あこがれの巴里といった感情を持ったのもわかるような気がします」<sup>一六</sup>と回想しており、フランス文化には政治性とい

う文脈があまり見出されていなかったことが読み取れる。むしろ戦時下における大衆娯楽といった観が強い。

川端もフランス文化には敏感であった。昭和四年から五年にかけて執筆された「浅草紅団」の中でも、フランス文化の混入した浅草を「一九三〇年型の浅草」と評している。

これらを踏まえた上で「高原」の混血児を考えてみたい。

羽鳥一英は「高原」について、「中心にあるのは、混血の美少女への、いかにも川端的なすべてを忘れたような感覚的憧憬、そして、この世界にすべて人種差別がなくなり、混血の世界が現出したら、という夢が語られている。本質的なコスモポリタニズムといていい」<sup>一七</sup>と述べるが、この「すべてを忘れたような感覚的憧憬」を可能としているのがフランスの「血」なのではないか。日仏混血児というキャラクターは、フランスという国が想起させる同時代イメージを考慮した上での演出だと判断できるのである。主人公の須田は、一度目の結婚に失敗した心の隙間を「空想的なもので充たしているようなところもある」男であり、フランスの象徴性が彼の空想癖を刺激するのは不思議ではない。

また、フランスとの混血児を設定することで、朝鮮やユダヤとの混血では避けられない政治的な文脈を回避することも可能になる。ゆえに、「すべてを忘れたような感覚的憧憬」を読み取られ、「本質的なコスモポリタニズム」に

繋がる見方がされるのだ。

ただし、これが真に「すべてを忘れたような感覚的憧憬」であるかどうかには疑問が残る。川端は混血児を「美しい」と評す一方で、その描写を細かく見ていくと、須田が美を感じているのは「日本風な肌の色の類」であるし、そもそも髪を除いては「あまり混血児らしいところはない」らしい。その上、フランスの「血」が強く出ている髪については「たうもろこしの毛の枯れたように汚く」と語っている。須田の価値観はむしろ「日本風」の方に主軸が置かれ、フランスの要素はあくまでそれを補佐するものとして機能しているのではないか。この在り方は「本質的なコスモポリタニズム」とまでは言えないようである。

こうした点に着目すると、フランスの要素が単なる憧憬としてのみ捉えられていたというのは論を急ぎ過ぎるものだろう。フランスとの混血は芸術や自由のイメージを強調する一方で、異国の「血」に日本的なものを幻視するには格好の題材になり得たのではないか。混ざり合う「血」が日本の要素を更に高めるといふ明らかな空想——こうした在り方を須田に見ることも、解釈としては可能であろう。

#### 四

「高原」に現れる「血」の問題は、混血児の場面だけに

留まらない。テクスト全体を貫いて語られる須田の結婚という話題も、「血」の問題に収斂されるべき物語要素だろう。作中、戦時下にも関わらず軽井沢で陽気に過ごす避暑客について、須田の姉は「そりやあ皆さん、根なしなんだもの」と指摘し、「根のある人も根を切つ」て軽井沢へ来ると語る。時局に煩わされず、こうした生活を謳歌する人間について言及した興味深い同時代評がある。堀辰雄の「風立ちぬ」についての評言であるが、引用しておく。

「死のかげの谷」堀辰雄

こんなにも特殊で選ばれた生活、(中略)今の世の闘へる人々にとつてどんなつながりであらう。世の讀者たるものは、この事をハッキリと認識した上で、この清純な客観視する余裕を持たねばならぬ。それを持ち得ない者は、所詮この作者と同じく社会的無用人である。

岡沢秀虎「文芸時評 三月の小説総評」(『早稲田文学』昭和一三年四月)より引用したものであるが、ここでは時局をはね付けたような「特殊で選ばれた生活」に対して、「今の世の闘へる人々にとつてどんなつながりであらう」と冷ややかに語られている。更に、そのような生活者を「社会的無用人」と切り捨て、読者にもその価値観を要求してい

る点は見逃せない。何より、この価値観に即して言えば、須田もまた「社会的無用人」に他ならないのである。

須田は一度目の結婚に失敗し、前妻との間には子供も居なかった。その上、徴兵検査では「第一乙」でありながらもまだ出征していない。姉の世話で洋子との縁談が持ち上がっているが、現状では「根なし」の一人でしかないのだ。とすれば、「高原」における結婚の問題は極めて重要で、それはつまり須田が家庭を持ち、戦時下において国家が奨励した家制度に収まることができるかどうか——すなわち「社会的無用人」を脱することができるかどうかという岐路でもある。

では、須田は果たして結婚に到達できたのであろうか。テクストを順に見ていきたい。

須田は当初、縁談の相手として交際する洋子に対し「この人と結婚したら、どんな風な家庭生活をすることになるのか、見当がつかぬのだつた」と語る。洋子が「短いパンツにソックス」で会いに来るような、当世風の女性であることが須田を戸惑わせていた。するとここで、更に須田を驚愕させる女性が登場する。洋子の友人である桂子だ。

新婚にも関わらず、桂子は夫が出征するとオートバイを飛ばして軽井沢へやって来る。そのことを洋子の口から聞いた須田は「あつげに取られ」て、「さういふ女もいるのかと今更らしく驚く」わけだが、それは須田がいわゆる「モ

ダンガール」<sup>一八</sup>風な女性に対して免疫がないためでもあろう。桂子は当時としては珍しい恋愛結婚しており、相手の家柄が良くないことを洩る家族に「二年も三年もねばつて、たうとう押し通し」た女性である。既に日中戦争が始まっている作中の時間軸において、彼女は時代にそぐわない少数派の女性だったはずだ。

この「モダンガール」的な桂子と、縁談相手の洋子が友人関係にあることから、須田は洋子のことも「自分と時代のちがふ、手のとどきかねる令嬢」と思い、「つつましく夫の出征を見送る日本の女とは、同じ国の娘とは思へぬ程ちがふのであるか」と不可解さを抱く。しかし、須田は常に洋子との結婚に消極的なわけではない。

もしものことがあつた後で、このやうに美しい女の肉体で須田を思ひ出してくれたらといふことは、生命の溢れた空想だつた。

また、別れた妻には子供がなかつたのだから、今洋子をつかまへなければ、自分の子孫をこの世に残しておくといふことは、遂に出来ないかもしれぬ。

須田は、自らが出征するかも知れないことを意識した途端、洋子に「急に強い愛情が湧き上つて来」る。洋子の美しい肉体に自分の記憶を託すこと——つまり自らの子孫を

残したいという欲求に駆られるのである。洋子に対して一  
抹の不安を抱えながらも、「どうしても二十一二としか見  
えぬ若々しさ」に惹かれて、須田は結婚を望み始めるのだ。  
だが須田の求婚に対し、洋子の反応は曖昧である。

「でも、自信がないの。お姉さまの注文、むづかし  
いのよ。」

「姉がなにを言ったんです。」

「須田さんの生活を変へなければいけないんでせ  
う。」

生活を変えるとはどういうことであろうか。同時代状況  
としては、若松伸哉が「当時の日本〈革新〉のための文壇  
における〈健康〉言説の発信」<sup>一九</sup>を指摘している。日中  
戦争二年目の昭和十三年は「本格的な戦争を完遂するため  
に国内体制の〈革新〉が大きく叫ばれ」た時期であり、「こ  
れらの動きは、文学においてはその内実を埋める〈健康性〉  
を求める声となって表出してくる」とされる。

この言及通り、戦争という現実直面した日本人が健康  
性や、あるいは生活の革新というものを求めるのは必然と  
言えよう。とするならば、須田が洋子の若々しい肉体（＝  
健康な肉体）に惹かれ、子孫を残すべく結婚を決意したこ  
とも、当時におけるリアリズム的思考と見ることができると

しかし、洋子は須田の「生活を変へなければいけない」  
ことに自信がないと語り、縁談を保留する。須田にとつて  
の生活の革新がどのようなものかは想像の域を出ないが、  
時代に求められた人生設計に向かうのは確実だろう。すな  
わち、健康な人と結婚し、家庭を持ち、子供を作つて、須  
田自身も出征する——といったような当時の国民モデルに  
近付くということである。この場合、洋子もまた家制度に  
迎合していくことが求められるはずだ。

だが、洋子は自信のなさを理由にこれを避けた。結果、  
二人の縁談はおそらく成り立たないであろうことを示唆し  
ながら、物語は未完のまま幕を閉じる。「混血の令嬢と並  
べて見て、洋子があはれになつたのも、面白いことだつた」  
という最後の場面における須田の語りは、洋子の健康性を  
希求するような時局性に立脚した「純血」結婚を離れて、「混  
血」の令嬢に対して膨らむ思いの方を価値づけている。つ  
まり、須田のリアリズムは敗れたのだ。彼は結局「根なし」  
のまま、空想の世界に誘われていく。

同時代に適合しようとしながら、現実の生活においては  
「社会的無用人」を脱せない人物の姿がそこにはある。

## 五

須田のような「根なし」の人々を受け入れる作中の軽井

沢は、この時点で時局性を猶予された空間とされている。そして川端は「高原」の時間軸を昭和一二年の夏に限り、翌年以降、政治的に変容していく軽井沢（Ⅱもはや猶予されない空間）を描かなかつた。このことについて、テクストの最後に当たる混血児の場面からもう一度考えたい。空想に誘われる須田の在り方は、どこへ向かうものなのかを見極めておく必要があるだろう。

夏ばかりでなく、軽井沢ばかりでなく、世界中到るところが、年中かういふ風にあらゆる人種の自由な雑居であるならば、世界はいまより平和であらうかとは、一応空想されることだつた。

右の本文引用のように、須田は様々な人種が雑居する世界を空想し、それが世界平和の礎となることを考えている。すでに引用した羽鳥一英の論において「本質的なコスモポリタニズム」と捉えられている部分であるが、これは時局に対してどのような位置づけをするべき空想なのだろうか。

本稿で説明してきた通り、「高原」が執筆されたのは昭和一二年から一四年にかけてのことで、日中戦争を契機として日本が大陸への進出を加速させる時期である。そこには無論、日本人による植民地支配という構図が存在するの

だが、そうした同時代状況と見比べると須田の空想は非現実的で、時局に批判的な思想と取れてしまいかも知れない。

しかし先述した通り、須田は同時代のリアリズムも持ち合わせた人間であり、彼の空想を単純に戦争批判と結びつけることはできない。更に言えば、こうした世界平和の考え方は、当時の日本が大陸政策のスローガンとして使用していた「八紘一宇」に近いものでもある。昭和初期のジャーナリストである清水芳太郎は「八紘一宇といふ事は、世界が一家族の如く睦み合ふことである」<sup>三〇</sup>と説明しており、それはアジア解放という大義名分を表す単語として認知されていた。

須田は「四十カ国程の人種が雑居する軽井沢を見て、」世界中到るところが、年中かういふ風にあらゆる人種の自由な雑居であるならば、世界はいまより平和であらうか」と空想しているが、このような考え方は同時代のスローガンに合致するものではないだろうか。もちろん、それだけの理由に須田が戦争を奨励しているという極端な解釈をするつもりは毛頭ないが、羽鳥一英の「この世界にすべて人種差別がなく混血の世界が現出したら、という夢が語られている」という言及における須田の「夢」は、日中戦争の大義名分と通底する危うさを持つているとも言えよう。

結婚の失敗を予期し、洋子ではなく混血児の方に価値を見出していく須田の在り方は、時局に適合できないような

人物像を示していながら、一方では時局に寄り添ってしまふような側面も潜めている。次第に政治性が色濃くなる軽井沢と同じように、須田もまた時局からは逃れられない。

川端が描かなかつた昭和一三年以降の軽井沢は、須田や洋子のような「根なし」の避暑客を表象する場ではなくなっていく。テキストに描かれた時局の問題は目を追うごとに大きくなり、やがては軽井沢というトポスも「根なし」の避暑客たちも変容を余儀なくされ、「高原」という作品自体を立ち行かなくさせてしまうのだ。

そして、「故郷」の拡散や人種雑居の問題を提起した川端の視線は、信濃作品群の執筆を経て満州国へ向けられることになる。昭和一〇年代前半に信濃を書き続けた後、一〇年代後半の川端が好んで満州と様々な関わりを持ったのは先行研究<sup>三</sup>の示す通りだ。未完に終わった「高原」や「牧歌」の続きは、異国人雑居の外地——新たな「故郷」——へと求められたのである。それはおそらく、須田が抱いた「空想」の行方でもあった。

## 六

昭和一〇年代という激動の時代に名作「雪国」と時期を同じくして書かれた「高原」は、多くの同時代的な問題を孕んだテキストである。その大まかな概要については今回

示した通りであるが、より詳細に見ていくには、昭和一〇年代の文壇との関連を更に探る必要がある。

「旅先作家」と呼ばれた川端の作品において、そこに描かれるトポスが時空の中でいかなる意味を持つのか。それは「高原」に限らず、川端文学をまなざすためには研究上の意味ある一点ではあるまいかと思われる次第である。

## 注記

川端康成作品の引用文は原則として三七巻本『川端康成全集』（新潮社・昭和五六―五九年）を底本とした。引用箇所の新字体は全て新字体に改め、仮名遣いは原文通りとし、ルビは省略した。また、文中の傍線は断りがない限り引用者による。

一 初出はそれぞれ左記の通り。

「高原」『文芸春秋』（昭和十二年一月）

「風土記」『改造』（昭和十二年一月）

「高原」『日本評論』（昭和十三年二月）

「初秋高原」『改造』（昭和十四年一月）

「樅の家」『公論』（昭和十四年二月）

『川端康成選集』第九卷（改造社・昭和十四年）において「高原」として収録される。

二 小松史生子編『軽井沢と避暑 コレクション・モダン都市文化 第52巻』（ゆまに書房・平成二十二年）八〇五頁

- 三 柴田翔「軽井沢と死のにおい——堀尾雄の作品をめぐる」堀尾雄「風立ちぬ・美しい村・麦藁帽子」(角川文庫・昭和四三年)
- 四 「第九巻あとがき」『川端康成選集 第九巻』(改造社・昭和四二年二月)
- 五 松本和也「川端康成「高原」連作の同時代受容分析」『国語と国文学』(明治書院・平成二七年四月)
- 六 「あとがき」『雪国』(創元社・昭和三年二月)
- 七 李明喜「川端康成と西川博士の「温泉報国」——雑誌『温泉』にみる『雪国』の同時代的言説」『名古屋大学国語国文学』(平成二三年一月)によれば、国家的な温泉利用が推奨された戦時下において、『雪国』は日本を想起させる「温泉文学」として読まれたと分析されている。
- 八 紅野敏郎「新風土記叢書」とその周辺」『文学』(昭和五八年一〇月) 参照
- 九 大原祐治「文学的記憶・一九四〇年前後——昭和期文学と戦争の記憶」(翰林書房・平成一八年) 一五一頁
- 一〇 堀内京「川端康成の信濃——信濃に「故郷」を見る試み」『千葉大学大学院人文社会科学研究所プロジェクト報告書』(千葉大学大学院人文社会科学研究所・平成二八年二月)において、川端は「牧歌」や「高原」の執筆を通して信濃に「故郷」を見ようとしていたことが指摘されている。
- 一一 山口俊雄「戦中小説における混血表象——石川淳「白描」・金史良「光の中に」を中心に」(山口俊雄編『日本近代文学と戦争——十五年戦争』期の文学を通じて) (三弥井書店・平成二四年)
- 一二 関楠生「ドイツ文学者の蹉跎——ナチスの波にさらわれた教養人」(中央公論新社・平成一九年) 九九、一〇〇頁
- 一三 民族主義的なイデオロギーの一つ。文化的な継承を意味する

民族の「血」と、祖国を意味する「土」の二つの要素に着目したものである。ナチスの台頭と共に広く普及し、差別的な人種政策の標語として使用された。

一四 一一に同じ

一五 村上仁美「戦前の日本におけるフランス印象派音楽のイメージ形成・文学者・評論家の言説を中心に」『表現文化研究』(神戸大学表現文化研究会・平成一五年一月)

一六 菊村紀彦「ニッポン・シャンソンの歴史」(雄山閣・平成元年七月) 一四七頁

一七 羽鳥一英「昭和十年代文学と川端」『国文学 解釈と教材の研究』(学灯社・昭和四五年二月)

一八 増田美子編『日本服飾史』(東京堂出版・平成二五年)によれば、モダンガールとは日本では大正末期から昭和初期に現れた「経済的・精神的自立や男女平等の意識を抱き、古いモラルや束縛から逃れ、自由な生き方を求める」女性たちとされる。

一九 若松伸哉「再生の季節——太宰治「富嶽百景」と表現主体の再生」『日本近代文学』(日本近代文学会・平成一三年五月)

二〇 清水芳太郎「建国」(平凡社・昭和一四年) 二六五頁

二一 川端と満州の関係を考察した先行研究としては、李聖傑「川端康成と旧満州について——一九四一年の旧満州紀行を中心に——」『民際——知と文化』(鼎書房・平成二五年九月)や、奥出健「川端康成——戦時下満洲の旅をめぐる——」『國學院雑誌』(國學院大學総合企画部・平成一六年一月)などが挙げられる。

(おおはし りょうや)